

## 女人・花堤防

小道 周帆

伊勢汲川村の庄屋佐兵衛は、天を仰ぎ「もう止めてくれえ、これ以上は降らないでくれよ」と祈りの気持ちに怒りを込めて声を発していた。鈴鹿川の水嵩は安楽川と合流する汲川村辺りで一挙に増えだしていたのだ。

ドンドンと板戸が弓なりになるほどの体当たりで米三が叫ぶ。

「もうダメだ。間もなく決壊するゾ」

村の集落は高台にあるものの、今年もまた丹精込めて作った黄金色になろうという稲田が水を被ることになってしまふ。あれだけ殿様をお願いしているのに・・・

この春にも佐兵衛は神戸城主本多忠升を訪ねた。殿様との面談は叶わなかったが、家老の松野清邦様には「嘆願書」をお渡しすることができ、口頭でも村の状況を説明させてもらった。

「毎年のように鈴鹿川は汲川村付近で氾濫します。それもそのはずで、ここには自然に土が堆積しただけの土手しかありません。何卒、村民の力で堤防を築くことをお認めいただきたいのです。藩の方針であります稲作増産の奨励にも合致いたすかと存じます。何卒ご許可をお願いいたします」

「うん、その方たちの願いは毎年届いておる。じゃがな、城下を守るか、稲田を守るかとならば、殿に限らず歴代の殿様がお達しされた通り、城下を守るべきという神戸藩の考え方を変える訳には行かないぞ。気の毒じゃが解ってもらいたい。今年も大雨が降らぬよう祈るしかないぞ」

庄屋佐兵衛宅には神戸城についての記録が残されている。それによれば、神戸城は天文二十四年（1555年）に神戸具盛によって築城され、永禄十一年（1568年）織田信長の三男・信孝を養子に迎えることによって、信長の伊勢侵攻から城を守ったとある。その神戸（織田）信孝が天正八年（1580年）に城の大改修を行っているのだ。その後、不幸にも信孝は兄・織田信雄と対立し自刃させられ、神戸藩はこれをもって途絶えてしまった。江戸時代になって転封によって城主がめまぐるしく変わり、天保十七年（1732年）に本多忠統様が神戸城主になって以来、その五代目が現在の城主本多忠升と記されている。

庄屋歴代の申し送り事項には、

一、神戸藩の方針として城下の安寧のために、鈴鹿川の氾濫は左岸に逃すこと。

一、そのため右岸の堤防は強固にして、左岸の汲川村の堤防は自然堤のみとする。

一、その禁を犯したものは打ち首に処するとされること。  
が明記されていた。

しかし庄屋佐兵衛は毎年の大雨対策として、左岸の自然堤防の決壊により右岸の城下だけを守る考え方に疑問を感じていた。永年の決まり事項とはいえ、鈴鹿川の治水対策を根本的に考え直して欲しいとの思いで、毎年築提のご許可をお願いに上がっていた。汲川村だけの問題ではなく、鈴鹿川全域の治水対策を強く訴えてきたつもりであるが、いつまで経っても藩は永年の方針をただ墨守するだけで、新しい発想や対策はされず、今年もまた洪水に見舞われ、稲田は全滅の危機を迎えている。

何にしても、ここ数年の鈴鹿川の水嵩は異常なくらい高くなる。しかしそれまでは氾濫することが稀であった。だからこそ、鈴鹿川と安楽川の合流点である汲川村のこの地を藩の方針で、稲作増産の一翼を担うべく新田開拓が奨励されたのであった。藩内の優良農家の次・三男がその任に当たり、ここまでの美田に育て上げてきたのだ。

それだけに佐兵衛はここ数年間の氾濫には納得のいかないところがあった。何かがあるとの思いで米三を従えて鈴鹿川の上流を探りに出た。その源流は高畑山にあり、汲川村から六里ほどで山地から平野に川が流れ込んでいるが、驚いたことにこの地点には立派な堤防がいつの間にか築かれていたのだ。

「あれじゃ、あれじゃ。あんなものが築かれているのでは、大雨の水は逃げることなく鈴鹿川に一本化され、一気に流れ込み汲川村にやってくる。」

「あそこに堤防が築かれているのなら、我が村にも堤防を築かないと未来永劫にわたって稲田は水にやられ放題になります。庄屋様、私たちに堤防を作らせてください。」

その夜、庄屋の屋敷に村人が集まった。すでに米三から上流の状況を聞いているだけに、皆の決意には熱いものがあった。

「上流の各村がてんでに堤防を築いているのだから、我が汲川村でも作るべきだ」

「そうだ、そうだ。城下の向いにあるからといって汲川村だけが自然堤防で被害を引き受けるのは納得できないゾ」

「子孫の繁栄を考えれば、例え打ち首にされても怖くはないぞ」

「みなのお持ちは最もだけど、だがな、少し冷静に考えないと。皆が本当に

打ち首になったら、村は潰れてしまう。そうすれば繁栄どころか大変なことがおこるではないか」

「じゃあ、庄屋さま、一体どうすれば良いのか。お願いに上がっても許可されないままで我慢せよというのですか」

一同、名案もなく沈黙が続く。

そこへ村の働きのキクが手を挙げた。

「今夜の集まりが心配で、主人といっしょに来てみたが、女のおいらの考えも聴いてくれんか」

「なんだ、おキクに名案があるのか」

「男衆は村の大事な人たちじゃ。そいらが打ち首になるのは確かに村が潰れることになる。じゃがどうだろう、女を打ち首にするか？殿様も多数の女を打ち首にする度胸はないのじゃないかえ。江戸からも睨まれ、大騒ぎになるのは間違いないことよ」

「だったらどうなんだ」

「おキクは何を考えているのか」

「村の女ども全員で堤防を作るのじゃ。この村には二百人の女がいる。どうだ、見つかっても二百人の女を打ち首に出来るか、出来るもんか、そうじゃろう」もはや男達はその毒気にやられてしまった。確かに本多の殿様は藩の学問に熱心な方で、朱子学への造詣も深く人物としては評判がいい。女の打ち首を平気でするような方ではない。そこを突いたおキクの考えには一理がある。

「しかし、おキクよ、二百人ではなく、その首謀者だけが打ち首になるとしたら、どうするのか」

「そんなのは覚悟が出来ているゾ」

「そうだと、おキク一人にはしないぞ」

と、タケとウメが立ち上がった。そしてこう言い出した。

「庄屋様に迷惑をかけられないので、我ら三人が勝手にやったことにしてもらいたい。勝手にやるのだからねっ、男衆の皆さん」

一ヶ月を掛けて作戦が練られた。

一、築堤は村の女が総出でやるが、一日おきの当番を決め、甲組はタケが責任者で、乙組はウメがそれに当たる。キクは両組を合わせて全体を見る。

一、時期は日暮れが早まり、農閑期でもある十月十六日から翌三月十五日までの五ヶ月間に限定し、日没から日の出前までとする。

一、完成は三年後を目指す、決して無理をしないこと。

一、築堤のやり方については、役人に気付かれないように薄く薄く、少しずつ

少しずつ積み上げ、その上に草花を植え付ける。

一、男衆は、全く無関係な作業として、丸岡山の土を掘り出し、牛馬車を使って田圃まで運ぶが、絶対に築堤には関わらないこと。

こうして、目立たない夜に作業が行われた。自然堤防を基盤にして、幅を広げていくことから始まった。気付かれないように広がった所にも雑草を置き、いかにも自然堤防であるかのように偽装していった。作業は順調で、誰一人として協力しないものはいなかった。村が一つにまとまり、村人の目も輝いていた。

汲川村から少し離れたところに東海道五十三次の四十五番の宿として庄野宿がある。東海道も神戸城に遠慮をして城下を通らず、鈴鹿川を挟んだ汲川村の側にある。この宿は宿場の中でも遅く設置され、寛永元年（1624年）に出来たもので、前の宿である石薬師宿に近く、また、海を渡り終えた桑名宿で散在し道草した反省もあって、旅を急ぐ者が多い。その上、二里離れて大きな亀山宿、さらに四里も歩けば関宿に着けることから、ここで泊まる旅人は少なく、寂しい宿場であった。

そんな宿場の茶店の一つに鈴屋がある。ここの女将は汲川村の貧しい百姓の出のお春である。何でも飯炊き女として下働きしていて、主人清吾への色香で今の位置を得たと噂されていた。確かになかなかの女で、歳の離れた清吾が病弱となると、その肉体は耐え切れず、見回り役人の田辺権之助と懇ろになり、いつの間にか権之助の妾となっていた。清吾もお春の欲望に応えられない己の身を嘆きつつも、そのことよって茶店を見回る役人に睨まれることなく、商売がやれたことから見て見ぬ振りをしていた。

それから二年の年月が過ぎ、女たちの築堤作業も順調に進んでいた。

今夜の権之助とお春の寝物語はいつもと少し雰囲気違って、こんな話が出ていた。

「お春、お前は汲川村の出だったな」

「そうですよ、旦那。でもね、あんな貧乏くさい所はゴメンということ、ここに来たんですよ」

「だけど、村には行くんだらう」

「いいえ、母親が死んで以来、もう十年近く行ったこともありませんよ」

「そうか、だがな、行って欲しいのだ」

「何をしにですか。何か悪企みでもあるんですかえ」

「いや、おれの代役を果たすだけだよ。というのは、何だか汲川村の様子が

変なんだよ。ちよつと行つて様子を探つて欲しいんだよ。そうそう、こうして、こうやつて隠れた所を探るんだよ」

「いやあ、何をするんです。そこは探る所じゃないでしょ。さあ、さあ、夜の明けないうちに、もつともつと楽しませてよ」

「好きだねえ」

「好きよ、好きよ、権之助さん大好きよ」

お春はそれから二日もしない間に汲川村を墓参りだという口実で出掛けた。確かに、野良作業をするしかない村にピーンと張つたような雰囲気が漂っていた。農作業のないこんな時期なのに村人が働いているのだ。田圃ではなく山のほうで仕事をしているようで、山で金でも掘り当てたわけでもないだろうし、変だなどの思いがした。

「ありや、鈴屋のお春じゃないか。珍しいこともあるもんじや、墓参りだどえ」  
「雨でも降るんじゃないの。今は最後の段階だというのに：」

「そういえば、お春は宿場の見張り役人権之助のコレだということなので、何だか匂うねえ」

「すると、我らを探るために来たのかえ」

「だとすれば、どうする？おキクさん」  
「堤防を作り出して三年目。今まで誰にも気づかれずにやってこれたが、頓馬な権之助でも気になりだした訳だわ」

「そりやそうだ、自然堤防がいつの間にかこんなに高く広くなつたんだもんね」  
「今まで稲を干したり、花を咲かせたりして誤魔化してやってきたんがね、そろそろ限界だね」

「この際だから、権之助に女だけでやってきたことを見せ付けてみようか」

「お春を上手く使うってことだね」

「でも、堤防を作っていることがバレタときはどうするの？」

「そりや捕まるってことよ」

「おキクさん一人を捕まらせる訳には行かないよ！」

「そうだ、そうだ」

「知恵者の家老はどう出るだろう」

「まずは家老へ私たちの気持ちや正直に伝えてみれば：」

「いやいや、いかに人のいい家老でもご法度破りを許すはずがない」

「じゃ、おキクさん、どうするの？」

「一か八か、度胸はあるけど名案があるから、心配しなくてもいいよ。任して

よ、大丈夫だから」

お春はもう少し様子を探ろうと、日暮れ近くまで居た。すると、どうだろう、男に代わって村の女がゾロゾロ出てきた。お春に声を掛ける風でもないが、何かを見せ付けるようにして楽しそうに歩いて行った。後を追うには目立ちすぎることから、慌てて茶店に戻った。

約束通り、権之助がやって来るや布団の中に迎え入れ、もぞもぞと触れながら、お春は汲川村の様子を面白おかしく話した。

「汲川村の女は夜だっていうのに、こんな好みこともせずに出かけてるようだよ。そう、隠れるように何かをしているようよ。隠れるようなところでは私たち二人と同じかねえ」

「バカ言うな、俺は隠れてしているのじゃないぞ。旦那も公然じゃないか。俺とお前はいいことしてるが、汲川村の奴らは悪いことをしているのじゃないか」  
「そう、そう、山か川で黄金でも探し当てたようだよ」

「そうか、何か隠し事でうまくやろうというわけだな。早速調べてみるゾ、ありがとうよ。お礼にたんまりと、さあ、さあ夜はこれからだ」  
「ううん、いいよ、いいよ、もっとよ」

翌朝、いつも以上にダラツとしながらも、権之助は村の外れにある丸岡山にいた。

「おい、何をしているのか。土の中に何かあるのだ」

「お役人様、ご苦労様です。何もありませんよ。土だけです。ご覧になってくださいませ」

「じゃ、この土をどう使うのだ」

「これは田圃に使います。来年の田に新しい土を入れないと、永年使い果てて土が弱っていますんで」

「そりゃ、感心なことだが、それにしても沢山掘り出すんだな」  
「いえいえ、まだまだ足りませんとも」

田辺権之助は村人の話にも納得が行かず、村を見てまわった。確かに男どもは馬を使って田圃に土を入れてはいるものの、掘り出した量とは釣り合いが取れていないことに気付いた。土は何処に行くのかと川筋を歩いていて、鈴鹿川の自然堤が頑丈になっているのに気が付いた。右岸の城側の堤防はしっかりととして高く築かれているものの、左岸の自然堤はもつと貧弱なものだったはずだ。となると、あの土が築堤に使われているのに相違ないと、木っ端役人の田辺権之助でも判ったようである。

よしっ、ここで手柄を立ててやろうとばかりに、日頃は威張るだけが仕事の

権之助が夜中に鈴鹿川を見回った。確かに人が大勢動いている。

「おや、あれは女どもではないか。女が堤防を作っているとは、どういうことなのか。男が誰一人いないのは、どうしてだ、なぜだ」

との疑問を持ったが、とにかく一大事であるのには間違いない。

翌朝、権之助は押っ取り刀で、のんびりと談笑している上司らに見たことを誇らしげに報告した。

「なに、ご禁制の築堤だと？しかも女が総出でしていると…」

「権之助よ、今までこのような大事なことにどうして気づかなかったのだ。お前の役目が出来ておらぬぞ」

誉められるどころか注意を受けるなんて…と、権之助は独り言ちる。

「まあ、権之助へのことは後にして、どう対応するかだ」

「しからば、重大な藩への裏切りであり、すぐさまその者たちを捕らえて、掟通り、見せしめのための打ち首にすべきことじゃ」

「二百人の女を捕らえて、打ち首とは大変なことだぞ」

「そこだ、そこ。どうも狙いはそこにあるな」

「そりあ一体どういうことですか」と権之助。

「お前には解らずともいい。まずはご家老にご沙汰を頂こう」

報告を聞いて家老の松野清邦は、内心では

「なかなか考えたの。庄屋佐兵衛が毎年やってきては必死の形相で願ひ事を申し出ており、このままでは納まらないとの思いはしていたが、女とはな」と、汲川村の意外な策に思わず笑みが洩れた。

さて、殿にはどう報告をするかな。まさか女二百人を引っ捕らえて打ち首にしましょうとも言えない。だからといって禁制破りを放置するわけにも行かず、はてはて、殿の立場を窮させるような沙汰は出来ないし、何か落とし所はないものかと、家老の思案は続いた。

役人達に調べさせた結果、鈴鹿川の築堤は汲川村の方針という訳ではなく、女どもの発案で勝手にしたようであり、その中心はキク、タケ、ウメの三人の女で、それに村の女衆全員が協力してやっていることがわかった。

家老の指示でその三人の女を城に呼び出し、松野清邦直々に取り調べをした。

「夜中に何をやってたのか」

「汲川村の自然堤防に草花を根付かせていました」

「何のためか」

「草が根付けば、花が咲き、川辺も美しくなり、やがて桜木も生え、堤防がい景色となると思つたのです」

「築提が禁じられていることは知っているな」

「もちろんです。堤防を作るなんて大層なことが女である私どもに出来るはずがありません。せいぜいお花を飾る台を作るだけのことです」

おキクの堂々とした話し振りは松野の想像を超えるものであった。シクシクと泣いて命乞いをするものばかり思つていた。なかなか強かな女だ。俺の落としたところまで用意しやがって……。チョット癩だがお家安泰のためには、おキクの狙いに沿うしかないな、と家老はいろいろと思いを巡ぐらせ、決断した。

「花台とな、ウウン、よし、解つた。草花を植える台座は作つても良いが、それは今まで通り女だけでやり、右岸の我々から見ても美しい花を咲かせること。但し、これからは誰からも台座を作っていることが見えるように昼間にやるようにしてくれ。そして右岸より二尺低い台座に限ることだ。いいな」

こうして、右岸より二尺低い花の台座という堤防を作ることが認められ、作業は一気にはかどつていった。

城下では、左岸が右岸よりも二尺低いことから、大水が出ても右岸は守られるとの思いがあり心配する者はいなかった。それよりも汲川村の花の台座堤防の出来具合を楽しみにするようになっていた。やがて春には水仙、すみれに芝桜で縁取られた美しい堤防となり、賑わいを見せた。

おキク、おタケ、おウメを始め、汲川村の女衆は総出で晴れやかな花堤防で祝いの宴を開いていた。

そんな中に、お春が忙しそうに酒や料理を運んできた。

「おめでとうございます。これは鈴屋からのお祝いの差し入れです。どうぞ召し上がってください」

「あれまあ、お春さん、大事な、大事な権之助さんはどうしたのかね」

「なんでも、権之助は築提の発見が遅れたことから咎められるはずだったが、お花台だったことからお咎めなしとなったそうよ」

「その権之助の力添えで、ちやっかり者のお春は、花堤防の茶店の権益を得たらしいよ」

「私たちの宴は盛り上がり、お春の話題の次には臆病者の汲川村の男どもものだらしなさにまで及んで、言いたい放題のようになった。それもこれも一時は打ち首を覚悟した女たちの喜びの表れなのだろう。」

汲川村の花堤防は女らしい優しさと、女の芯の強さで築かれた堤防であり、鈴鹿川の流れも雨の多いときであつても、この花堤防に遠慮するかのように海



に向って流れていき、洪水になることはなかった。

遂には神戸城主本多忠升様も評判を聞きつけて女人・花堤防にやってきた。これをきっかけに、永年に亘り洪水に備えて稲田を遊水池にするという藩の方針を変え、花堤防にヒントを得て、桜の堤を鈴鹿川全域に奨励し、治水に力を入れた。後年には神戸城主本多忠升は学識と併せて治水統治の名君とされるようになった。

もちろん、藩はそうした治水政策に目を向けさせたキクをはじめ、村の女衆に金一封と絹五反を与えて功績を称えた。

\* \* \*

築堤から四十余年が経ち、庄屋の家に一人の病でやつれた老婆が訪れていた。「私は昔、庄野宿と花堤防で茶店をやっておりますと申します」

「・・・・・・・・」

「汲川村の出でございますが、あの花堤防を築いた村の女衆を誇りに思っております」

「そのことは私も同様で、いきさつについては亡き父・佐兵衛から聞かされております」

「ここに少しばかりですが全財産を持って参りました。汲川村の女衆が命を賭けてあの堤防を築いたことへの感謝の気持ちと、私自身はお詫びとお礼の印として、どうか記念碑を建てて、村の誇りとして語り継がれるようにして欲しいと思っております」

永年、抱いていた気持ちを吐露し、これでようやく愁いなく来世に往ける安堵の気持ちからか、病身のお春の顔に光が射したようであった。

完

(注) この話は旧東海道四十五番目の庄野宿近くにある『女人堰跡碑』からの創作です。史実を裏付けるものは残っており、誰が建てたのか、この石碑が女の力を見せるものとして残されています。